

なら歴史芸術文化村 Journal

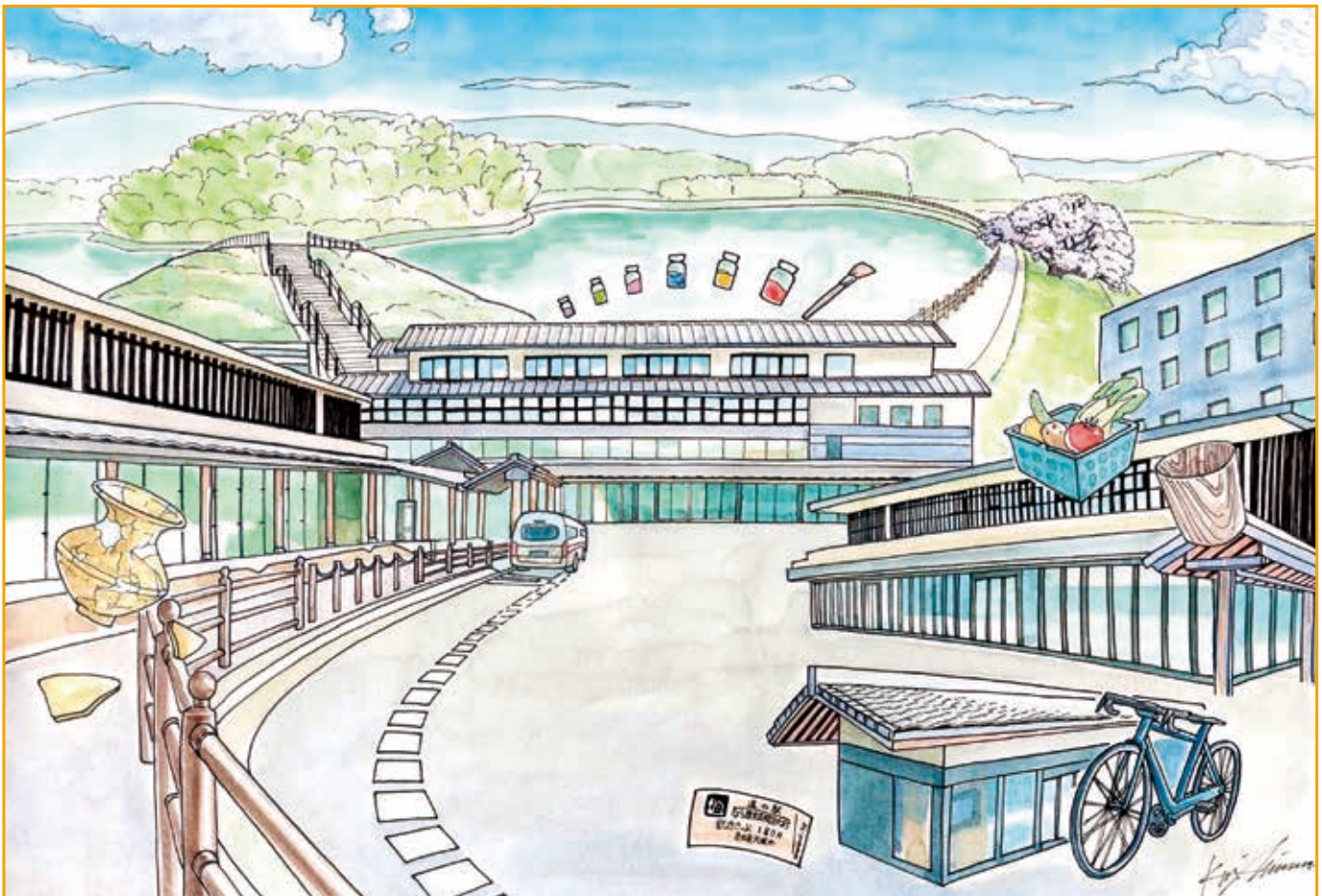


©NARA pref

- 開村記念イベント
- 文化村の取り組み
- 修復技術団体紹介&メッセージ
- 村内トピックス

2

vol.



ご挨拶

開村からこれまで、なら歴史芸術文化村に多くのご来訪者をお迎えすることができ、関係の皆さまに心から感謝申し上げます。文化振興施策の推進拠点として、また、地域振興に寄与する施設として、今後も官民連携しながら効果的な施設運営と取組展開に努めます。

なら歴史芸術文化村 村長 三原耕治

奈良発 文化の力

歴史、芸術、食と農など、奈良県が誇る文化に触れ、学び、体験できる施設「なら歴史芸術文化村」（以下、文化村）が3月21日に開村。新たな一步を踏み出したこの日、式典に続いて開催された、開村記念シンポジウム「奈良発 文化の力」についてご紹介します。シンポジウムでは、荒井正吾奈良県知事、奈良県文化政策顧問の青柳正規さん（元文化庁長官、文化功労者）、奈良県出身の洋画家・絹谷幸二さん（文化勲章受章者）が登壇し、ファシリテーターを務めた太下義之・同志社大学教授の進行で子どもから熟年者まで、すべての来村者の感性をひろく、文化村への思いを語り合いました。



『なぜ？』から育つ自尊心

討論は文化村のキャッチコピー「『なぜ？』が芽生える。『知る』を楽しむ。」に込めた荒井知事の思いからスタート。

荒井知事は運輸官僚としてパリに駐在していた時、ルーブル美術館に案内した日本人の多くが、教科書に載っていた作品ばかりに注目し、ほかの作品にはほとんど関心を示さなかった、とのエピソードを紹介。「芸術と向き合

う時は、それまでに得た知識は忘れ、自ら『なぜ？』と問いかけ、『知る』を楽しむ方が楽しいのではないかと考えるようになった」と述べ、「子どもころから『なぜ？』と問い続けることが自己確認につながり、自尊心が養われる。日本人に欠けがちな自尊心を育むことは同調圧力に負けず、多様性を認め合う社会の実現につながる」と提起しました。

続いて、絹谷さんが「コロナ収束後の文化立国に向け、新たな発想が生まれる出発の時期に文化村が誕生した、このタイミングが素晴らしい」、青柳さんが「我々がこれから一番期待できるのは異分野交流。さまざまな出会いが用意された文化村から、新しい何かが生まれる気がする」とそれぞれ期待を語りました。

教育にアートを

「心には形がないが、何百年も前の絵描きの心を映した絵は、『止まって残る』（絹谷さん）、詩は絵のように、絵は詩のように、という言葉がある。現実を突き詰める散文に対し、時空を超えて本質を語る韻文は絵画などの芸術に通じる」（青柳さん）など、示唆に富んだ芸術文化論に続き、やがて話題は次世代育成へと展開。

日本藝術院の社会貢献事業「子供夢・アート・アカデミー」の一環で、自ら芸術の出前授業を続けている絹谷さんは「この事業のヒントはかつての

米国にある。科学技術力の増強を狙って理数系の授業を増やし、その分、芸術文化系の授業時間が削減された時、事態を憂慮した民間団体が、いち早くアーティストを講師として教育現場に派遣した」と話し、「文化村も、未来を担う子どもたちに、芸術を通して心の光を届ける場となって欲しい」と力を込めました。

青柳さんも米国の教育事情に言及し「当初はSTEM（システム）教育Ⅱ科学・技術・工学・数学Ⅱで国を盛り上げようとしていたが、それだけではだめ、との気付きから、今はA（芸術）を加えたSTEAM（ステイム）教育となっている」と解説。荒井知事は「経済を振興させるにも、人の気持ちに本当に訴えるものを見極める感性が必要」と共感しました。

文化村で大人も再生

荒井知事はまた「今回の討論では次世代への思いが強調されたが、文化村は年配の方々が意欲を持ち、楽しく生きるための場所、大人が再生するリカレント教育の場でもある」と強調。

続いて太下さんが、ポスト大流行後のロンドンでブームとなった「コヒーハウス」の歴史をひもとき、「そこに集ったアーティストや科学者が当時の芸術文化、科学技術を牽引した。文化村も、ぜひ、そのような場に」としめくりました。

Opening Event

3月21日の開村記念シンポジウムを皮切りに、文化村では、3月22〜27日の6日間、多彩なゲストによるオープニングイベントを実施しました。

語る文化村

episode 1 3/22

「近世大和の美術工芸」
岡本彰夫さん
(奈良県立大学客員教授)

岡本さん(曾爾村出身)は「桃山時代以降の奈良の文化は、ほとんど研究されていない」と話し、見事な鹿の絵を残した内藤基淵らを紹介。「世に出ずとも信念を貫いた人々を語り継ぎ、現代の作家の作品を購入して使うことが奈良の文化・技術の継承」と力を込めました。

episode 2 3/23

「異質なものを同士をつなぐアートの力」
西尾美也さん
(奈良県立大学准教授)

作品の作り手と受け手、作品と社会をつなぐアートマネジメント人材の育成に取り組む西尾さん(奈良市出身)は「アートの力とは受け手の感受性や想像力も含めた双方の力。文化財や現代のアーティストの表現に出会える文化村は非常に面白い学びの場」と期待を述べました。

episode 3 3/24

「考古学の魅力」
「仙之内火葬墓の謎にせまる」
桑原久男さん
(天理大学教授)

山の辺地域の古墳群を調査研究す

桑原さんは、文化村近くの仙之内火葬墓について「被葬者は石上宅嗣が有力だったが、その後の研究で石上麻呂などの可能性も出てきた。また、副葬品の海獣葡萄鏡は保存状態が良く、大変美しい」と話しました。

episode 4 3/25

「レッジョ・エミリア・アプローチとは？」
永渕泰一郎さん
(畿央大学准教授)

永渕さんは文化村のアートプログラムにも取り入れられたイタリア発の幼児教育法を紹介。アートを中核に自尊感情や共生の世界観を育む理念と実践を考察し「この理念に基づき、個々の文化にあった実践が子どもたちを幸せにする」と語りました。

クリエイティブ文化村

Vol.1 talk session 3/26

「歴史とアートの融合」
三瀬夏之助さん(東北芸術工科大学教授)
★ 岡田靖さん(東京藝術大学准教授)

斬新な大作で日本画の新境地を切り拓く三瀬さん(奈良市出身)と仏像の保存修復を追及する岡田さんは今春まで山形県にある東北芸術工科大学で共に勤務しました。地域の仏像の再生など『山形』にフォーカスした当時の活動の解説に続き、奈良県立高田芸術高校、奈良芸術短期大学、関西文化芸術高校の生徒・学生との対話を展開。

若者側からは表現意欲の根本など本質を突く発言が続き、岡田さんが「地域文化は残すだけでなく、活用してこそ意味がある」、三瀬さんは「歴史とアートをつなぐには『広場』が必要。この文化村が、多彩な人が出入りし、新たな動きが生まれる『広場』になれば良い」とそれぞれ述べました。途中、世界的ヴァイオリン奏者の小川響子さん(檀原市出身)によるステージパフォーマンスがあり、スペシャルゲストとして登場した澤和樹・前東京藝術大学学長のビオラとの二重奏を披露する場面もありました。



Vol.2 talk session 3/27

「アートの可能性を探る」
高谷史郎さん(ダムタイプ)
★ 真鍋大度さん(ライゾマティクス)

アーティストグループ「ダムタイプ」のメンバーで個人としての制作活動も展開する高谷さん(王寺町出身)と最先端技術と表現の新たな可

能性を探究する「ライゾマティクス」主宰の真鍋さんは、現代日本を代表するメディアアーティスト。坂本龍一さん、野村萬斎さんらさまざまなアーティストとのコラボレーションも手がけ、国内外で活発に発信するふたりが京都芸術センターのアーツアドバイザー山本麻友美さん(五條市出身)の進行で語り合いました。

滞在制作の拠点としての機能も備えた文化村が日本文化の源流である奈良に誕生したことについて高谷さんは「面白い、と思うアーティストをどう招き、どんな作品を生み出せるか、そこが重要」、真鍋さんは「表現の趣旨を理解して受け入れ、地域ぐるみでアーティストを支えてくれる、そんな場所になればうれしい」とそれぞれ話しました。

冒頭には磨赤兒さん率いる舞踏カンパニー「大駝駝艦」の鈴久奈緒美さん(奈良市出身)が「阿修羅」を踊るステージパフォーマンスがありました。



文化村でみんなが学ぶ

歴史文化に関する取り組み

●文化財修復・展示棟 企画展

文化財修復・展示棟の展示室では1年を通して5回程度企画展を開催しています。

2022年3月21日（月・祝）にオープンしてから3つの展覧会を開催しました。奈良県には、国宝や重要文化財に指定された誰もが知る有名な文化財が多くありますが、それ以外にも地域で大切に守り伝えられてきた文化財がたくさん残っています。企画展では、そのような文化財を中心にご紹介しています。

地元の人にだけ知られている、もしくは地元の人さえもその魅力に気づいていないような文化財をひろく紹介し、自分の住んでいる地域やゆかりのある場所にもそんな存在があるかもしれないと思える、新たな気づきを得られる場所を目指しています。

先人たちが守ってきた文化財をどのようにこれからも守っていけばよいのかみなさんと考えることができる場として、有形無形にかかわらず魅力あふれる文化財を様々な視点から紹介していきたいと思います。

（歴史文化係 吉田綾乃）



第2回企画展 展示室のようす

芸術文化に関する取り組み

●アーティスト交流プログラム

芸術文化体験棟では、様々なアーティスト交流プログラムを行っています。「文化村クリエイション」は、先進的な取り組みを行うアーティストを招聘し、なら歴史芸術文化村を拠点に新作を創作し、その様子を公開していく試みです。3～5月にはその1人目として、美術家の黒田大スケさんを招聘し、制作に向けたリサーチをじっくりと行いました。活動の様子を新聞形式にまとめた「ならもぐ新聞」は、現在も不定期で発行を続けています。今冬にはリサーチを基にした展覧会を予定していますので、みなさまお楽しみに。

6月には「奈良ゆかりのアーティスト交流プログラム」の第一回として、橿原市在住の彫刻家・高垣リミさんを招聘しました。期間中は作品展示を始め、ワークショップや公開制作、高垣さんと気軽に話ができる「おしゃべり会」を開催するなど、様々な形でアーティストをご紹介しました。展示の中でも、等身大のヤギが28頭並ぶ作品《東と西のあいだ》は圧巻でした。

（芸術文化係 遠山きなり）



黒田大スケ リサーチのようす



高垣リミ《東と西のあいだ》

●幼児向けアートプログラム 『そざいきち』

「奈良県の子どもの自尊感情は全国平均に比べて低い。」

これは平成30年に行われた全国学力・学習状況調査で明らかになりました。

自尊感情、規範意識、学習意欲、これらを高めるには就学前から継続し解決に取り組むことが必要です。

当施設では、「奈良県版就学前教育プログラムはばたくなら」に基づき、イタリアの「レッジョ・エミリア・アプローチ」を参考に幼児向けアートプログラムを運営しています。

「はばたくなら」も「レッジョ・エミリア・アプローチ」も、環境と保育者を大切にしています。そして私たちが行っているプログラム『そざいきち』では、子どもの「やってみよう」という心の動きに着目しています。

春に開催した「光と影の遊び」では、光を当てる角度を変えることで影の形が変化すること、セロハンを重ねることで混色すること、素材を組み合わせると様々な影の形が生まれることなどを子ども自ら実践し発見していました。

子ども達は素材に出会い、触れながら考え、挑戦します。

『そざいきち』では、これからも様々な素材やテーマを用意し、過程を尊重することで子ども達の自尊感情の向上に寄与したいと考えています。

（芸術文化係 松長大樹）



2歳児。ライトを使ってペットボトルに光を当てます。影が壁に映ると「できた!」と教えてくれました。

文化村からつながる、文化村から広がる

担当者の取り組み

●修復工房見学ツアー

「修復工房見学ツアー」では、文化財4分野の修理過程や、各工房が今現在どのような修理作業をされているのかを説明しています。そして修理の意義や文化財の価値について考えて頂く場もあります。

文化財修理は、日常生活では接する機会のない未知の世界ではないでしょうか。解説を担当する私たちも長いスパンで修理に立ち会う経験はほぼ初めてで、内心は小躍りしたいほど興奮しています。修理作業が進むにつれ、見どころや説明したい情報が増えるので、嬉しい反面ツアー時間が延びがちになるのが悩みの種です。

解説ツアーでは参加者の皆様の色々な反応がみられ、また思いがけない質問が飛び出します。「なぜ古いものを大切にしなければならないのか」等々、素朴な質問には「そういえば確かに」と気付かされます。その一方で、遠慮がちで奥ゆかしい方がまだ多い印象です。「旅の恥はかきすて」の気持ちで、「なぜ？」と思ったことを是非言葉にして頂きたいです。（歴史文化係 坂本あゆみ）



修復工房見学ツアーのようす

●奈良を発信する重要拠点として

なら歴史芸術文化村は、来訪者がアートを身近に楽しむための担い手としてアートコミュニケーター（AC）の育成事業を行っています。今年度は、奈良芸術短期大学の学生さんに参加を呼びかけ、現在13名が活躍中です。活動について一例を紹介します。

今春、芸術文化体験棟で開催したアーティストの土佐尚子さんの展示では、47体のガラス作品《弥勒と声聞》が並びました。「作品をじっくり観てもらいたい」とACの皆さんが企画したのは、来訪者が好きな1体を選んで投票する「声聞総選挙」です。「なぜ、その作品を選びましたか?」「色がきれい」「形がかっこいいから」など鑑賞者との会話も弾みました。

この活動のポイントは①ACの自発的な活動であること②来訪者・AC・文化村三者ともにメリットになることです。当初、手探りの状態でスタートし、今も様々な課題がありますが、一つ一つ丁寧に向き合い、今後は他大学や一般の方へも広げたいと思います。（芸術文化係 西川みゆき）



アートコミュニケーターの活動のようす
ガラスの作品を型どったぬりえコーナーも設置。子どもから大人まで楽しみました。

●『そざいきち』を4ヶ月経験して感じたこと

私は、これまで4年の保育経験があります。その中で、子どもの気持ちに寄り添うことを大切にしてきました。

4ヶ月前、初めてレジジョ・エミリア・アプローチを体験し、「日本とイタリアの文化の違いから、子どもへの関わり方や考え方がいいな。」と感じることもあれば、今までの保育経験とのギャップを感じ複雑な気持ちになることもありました。

少しずつこの環境に慣れ、今では『そざいきち』を通して大切にしたいと感じていることがあります。

それは『あそび=学び』ということです。

保育園では、子どもの自由な活動の中でも、大人の都合で制限されていたり、選択肢が少なかったりと今思えば完全な自由ではなかったように感じます。

『そざいきち』では、絵具でどこ（壁、床、紙、ビニール）に何を使って（指、筆、綿棒）描くか自由を選ぶことができます。そのあそびの中で五感を働かせることで、どんどん探究し深めることができるのです。子どもが自ら発見し学ぶことができるように見守り、最後は共感されたり認められたりすることで、自尊感情が築き上げられていくのだと思います。

『そざいきち』のプログラムでは、毎回年齢や人数が違うため子どもたちに臨機応変に対応することが求められます。まだまだ未熟ではありますが子どもたちを尊重し、ただ楽しいだけではなく、さらに深まっていく、ここから広がっていく場を作っていけるように努めたいと思っています。

（芸術文化係 梅原あかり）



土絵具で手や筆を使って壁に自由に絵を描いているようす

修復技術者紹介&メッセージ

奈良県文化財保存事務所

奈良県文化財保存事務所は県内の指定文化財建造物の修理を専門に行う組織です。この工房では主に木造建造物の修理を行っています。建物を解体して工房に搬入し、各部材は破損の程度に応じて継木・矧木などの修理を行います。そして仮組をして納まりを確認した後、現地で組立てます。

担い手からのメッセージ

文化財建造物の保存修理はあくまでも建物が主役であるため、我々修理技術者は裏方となり次世代に文化財をつないでいく事が使命であり、我々もその建物が積み上げてきた長い歴史の一部分にしか過ぎません。皆様にもその長い歴史の1ページを感じていただければと思います。



天理市教育委員会 文化財課

天理市文化財課は、市内の文化財を将来に守り伝え活かしていくために様々な仕事をしています。この工房では、市内の遺跡発掘調査現場から出土した考古資料（土器など）の破片を組み合わせ、本来の形状を復元する作業に取り組んでいます。

担い手からのメッセージ

一つ一つの土器の破片に、どの遺跡から、いつ、どのように出土したのか注記します。そして、本来の土器の形状を想像しながら組み上げていきます。組み上げる順番を間違えると破片がうまくはまらなくなることもあるので、慎重に作業するようにしています。



公益財団法人 美術院

岡倉天心が明治31年（1898）に創設した「日本美術院」の国宝修理部門を起源とし、百年以上にわたり文化財修復を行っています。美術院が保持する「木造彫刻修理」技術は、文化財保護法が定める「選定保存技術」に選定されており、国宝・重要文化財に指定されている彫刻作品のほとんどを手がけています。

担い手からのメッセージ

仏像などの文化財の多くは、造られてから現在までに幾度もの修理を経て、大切に守り伝えられてきました。我々が行う修理も文化財を次の世代へと伝えていくためのものです。伝統的な修理材料や道具の減少など課題もありますが、貴重な文化財を未来に残すため、日々研鑽を重ねています。



株式会社文化財保存

平成11年（1999）設立。絵画・書跡等の文化財修理、技術者の育成、保存修理技術の開発などに取り組んでいます。国宝・重要文化財などの文化財修理を行う技術者集団「国宝修理装演師連盟」の奈良における唯一の加盟工房です。連盟は国の選定保存技術「装演修理技術」の保存団体として選定されています。

担い手からのメッセージ

掛軸や屏風の修理と聞くと年配の職人のイメージがあると思いますが、修理の現場では20歳代から40歳代が主力となっています。近年では専門的な光学調査や化学的な知識が文化財修理に求められており、大学において文化財学を学んだ技術者が増えています。



ACCU奈良事務所（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）の役割

（奈良の地から文化遺産保護を通じて国際協力や地域交流を推進する）

多くの文化遺産を有し、また、日本の文化遺産の調査・研究の中心でもある奈良の地に、奈良県や文化庁などの協力・支援を得て、1999年8月に開設されました当事務所は、ユネスコやイクロムなどの国際機関と連携しながら、アジア太平洋地域の文化遺産保護活動に携わる人材を育成するための研修事業など、さまざまな国際協力事業を展開しています。

人材育成の主要事業である「集団研修」では、これまで37カ国から延べ326名の研修生を受け入れており、現在も研修修了者の多くが、この成果を活かし、それぞれの国で活躍しています。

また、文化遺産保護の大切さについて理解を深めていただくため、公開型の「文化遺産セミナー」や県内高校生を対象とした「世界遺産教室」を開催しています。



「集団研修」

アジア太平洋地域15か国から16名の研修生を招いての臨地研修（平城宮第一次大極殿南門 復原整備工事現場）

木工体験ワークショップを開催

今年、なら歴史芸術文化村に移転した当事務所は、今後とも、文化遺産保護を通じて国際協力や地域交流のための拠点としての役割を果たせるよう、奈良県や文化庁、関係機関・団体とさらなる連携を深め、様々な活動を進めていきます。

「奥大和」は山岳地帯の奈良県南部から、高原が広がる東部にかけての19市町村からなる地域。

その地域の特色を活かした木工品の制作ワークショップでは、参加者が自由に選んだ木材でのカッティングボード制作や吉野杉の面皮でのアクセサリ制作など、木の美しさや技術の素晴らしさに触れる体験を楽しみました。

「実際に奥大和を訪れてみたい。」という声も寄せられ、「奥大和」の魅力が伝わる良い機会となりました。

（奈良県奥大和移住・交流推進室）



「うまくカーブがつくかな……」と集中。この後、サンドペーパーで角や表面を磨いて作品が完成しました。

① 当地PR展@文化村

第一回天理市

「なら歴史芸術文化村」の観光案内所（情報発信棟）において「ご当地PR展@文化村」が開催されることとなり、令和4年7月15日から31日の間の第1回目は、まさに地元である天理市の魅力紹介となりました。

テーマは「山の辺の道 季節の彩り」。

天理市には日本最古の道とされる「山の辺の道」が通っています。その雰囲気を感じられるよう、ディスプレイでは自然や歴史ここでの暮らしの映像が流れ、多くの四季折々の美しい写真パネルや万葉歌碑の拓本の掛け軸、「めぐみめぐるてんり」ブランド製品が並び、この地ならではの空間が広がりました。また、子ども達ご家族と一緒に楽しめる仕掛け（写真の謎解きゲーム）もあり、時空を超えた旅ができるまちを現す天理市の英語キャッチコピー「Time Travel City」も紹介されました。

（天理市産業振興館）



秋は絶好の行楽日和。なら歴史芸術文化村を起点に山の辺の道や各地をゆっくりとめぐってください。Be a Time Traveler.

② ここが思い出の拠点になる

フェアフィールド・バイ・マリオットは全国各地の道の駅に隣接し、その土地ならではの体験、美しい自然、地域の人々とのふれあいなど新しい旅体験を提案しています。

当ホテルも、「なら歴史芸術文化村」に隣接し、古都奈良の歴史や自然の中で、ゆっくりとくつろげる快適な空間で皆様をお迎えいたします。

先日、荒井正吾奈良県知事がお越しになり、「素晴らしい環境の中で本当に気持ちよく過ごせるホテルだ。」とお褒めいただきました。

「ただ、ホテル内での食事の提供がないので、地元の飲食店からのケータリングなど、地域と連携するようなことも考えたらどうか。」とのお助言もいただき、実現に向けて対応したいと思っています。

今後、宿泊者の皆様にご満足いただけますよう、温かいおもてなしの精神で皆様のお越しをお待ちしています。（フェアフィールド・バイ・マリオット・奈良天理山の辺の道支配人 星野滋）



ゲストがゆったりと気楽におくつろぎいただけるよう、ぬくもりある心地よい空間をご用意しています。

見晴らし抜群！
金剛葛城山、二上山、
生駒山系も一望。

眺めの良い3階の
交流ラウンジで息の
大和青垣の山並みと
幾帳池の美しさに
うっとり。

絵本や塗り絵でも
遊んでね。

「そざいきち」には子どもたち
が大好きな素材がいっぱい！
遊んでいるうちにアートが
出来たよ！

ホールではコンサート
や演劇など魅力的な
イベントを開催。

春には大きな一本桜が
立派な花を咲かせて
皆様をお迎え。

朝の空気を吸いながら
お散歩するのもおすすめ！
ホテルに一度泊まって
みてね。

2階にはピカピカの
調理実習室も…！

道の駅ならではの
アイテムを探して
みませんか。
お気に入りの見つ
かるかも！

新鮮野菜や果物が
色とりどり。
柿の葉寿司やお弁当
の種類も豊富！

週末は普段入ること
のできない工房内で
ワークショップも
ひらかれるよ。

発掘された土器や
埴輪を元の姿にくっ
ついたり、神社などの
建物を直しているよ。

薬師寺三重塔の
レプリカ発見！
ギャラリーコーナー
で文化財をもっと
調べてみよう。

奈良県内各地の
絵画や仏像に思わず
会えるかも！

石上神宮までは
徒歩約20分。
内山永久寺跡へは
徒歩約15分。
足を延ばしてみよう。

ストリートピアノを
弾くと何かプレゼント
がもらえるかも…。

観光情報は
コンシェルジュに
おまかせ。

2階の多目的室は
お食事や休憩に使用してね。
奈良の食に関するパネル展示も
あるよ。

デザイン
西村勝利

来村者にやさしい文化村で楽しい体験

土日祝実験運行中 ※運行期間：令和4年11月30日まで

奈良公園エリアとなら歴史芸術文化村が

直行シャトル でつながる

予約できる発車時刻	
奈良公園 エリア発	9:00 11:00 13:00 15:00
なら歴史芸術 文化村発	10:00 12:00 14:00 16:00

運賃 1人 2,000円

- ※事前予約制
- ※発車予定時刻の1時間前に予約終了します
- ※ジャンボタクシー(定員9人)相乗りで運行

9:00~17:00 運行中 ※運行期間：令和4年6月1日から
令和5年3月31日まで

※7:00~9:00、17:00~20:00は直行バスが運行します。

近鉄・JR天理駅
天理駅1番バスの
りば発

なら歴史芸術
文化村

直行デマンドシャトル 運行中

直行バス時刻表	
天理駅発	7:23 7:58 8:33 17:44 18:16 18:55 19:25
文化村発	7:39 8:14 17:30 18:00 18:30 19:09 19:39

運賃(片道)	直行バス	大人 260円 小児 130円
デマンドシャトル		1人 300円

アプリ・直行デマンドシャトルに関するお問合せ

mobi (モビ) カスタマーサポート
050-2018-0107
※9:00~19:00

直行バスのお問合せ

奈良交通お客様サービスセンター
0742-20-3100
※8:30~19:00

予約はアプリが便利！
ダウンロードはこちら→

【開館時間】

- | 文化財修復・展示棟 | 芸術文化体験棟 | 交流にぎわい棟 | 情報発信棟 |
|---|------------------|---------------------------------------|-------------------------------|
| ●開館時間：9:00~17:00 | ●開館時間：9:00~20:00 | ●開館時間：9:00~18:00
※レストランは9:00~20:00 | ●開館時間：9:00~17:00
※トイレは24時間 |
| ■休館日：月曜日 ※祝日の場合は、翌平日が休館
※交流にぎわい棟は月曜日も営業
※情報発信棟トイレを除き、12月28日~翌年1月4日は休館 | | | |
| ■入館料：無 料 ※催しにより有料の場合有り | | | |



なら歴史芸術文化村

〒632-0032 奈良県天理市杣之内町 437-3
TEL 0743-86-4420(代表)

WEB <https://www3.pref.nara.jp/bunkamura/>
※感染症対策にご協力ください。



©NARA pref.

